

# 大学での学びと初期キャリアの関連性についての考察

## 多文化社会学部卒業生アンケートの結果から

長崎大学 白井 章詞

### 1. はじめに

本稿では、長崎大学多文化社会学部1期生～3期生の卒業後のキャリアについて、実態調査の結果とアンケート回答者の社会人経験から、学習成果および専門的知識の実社会での有用性について考察する。したがって、本稿の目的は、これらの考察結果を本学部における教育・研究活動の改善を図るための基礎資料として活用することとしたい。

多文化社会学部の教育理念は、「グローバル化時代の多文化社会において必要とされる人間力と社会力」を身につけ、多様な文化的背景を持つ人々と協働し、グローバル化する社会を担い、たくましく生き抜く力を有するグローバル人材を世界に送り出すことである。ディプロマポリシーについては、「高度な英語力とコミュニケーション能力」「文化的多様性の意義を理解できる」「共生的な関係を築き問題解決に向けて行動する」の3つを目標に掲げて、その達成にむけた教育に取り組んできた。2020年3月には、3期生を社会に送り出している。学内の他学部と比較すればその数はいまだ少数ではあるが、本学部学生の学習成果をキャリア形成の視点から把握し、教育プログラムを通して習得した専門性の社会における有用性を検証することは、今後の本学部の教育改革を考えるうえでも不可欠であるといえるだろう。

### 2. 調査概要

7・5・3現象ともいわれているように、就職して3年以内に中卒者の7割、高卒者の5割、大卒者の3割が離職する実態がある。厚生労働省の調査(2018)によれば、初職を離職した理由として、「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかった」(30.3%)が最も多い。次いで、「人間関係がよくなかった」(26.9%)、「賃金の条件がよくなかった」(23.4%)、「仕事が自分に合わない」(20.1%)の順となっている(3つまで複数回答)。こうした現

状を踏まえ、多文化社会学部では、2020年度に1～3期生を対象にアンケートを実施した。

#### (1) 調査対象と調査方法

多文化社会学部を卒業した1期生から3期生のうち、学年ごとのライングループに登録している卒業生を対象に、Webアンケートを送信して実施した（有効送信数：1期生78名、2期生60名、3期生63名）。

#### (2) 調査期間

2020年8月中旬から下旬。

#### (3) 有効回答数（有効回答率）

2014年入学者24名（31%）、2015年入学者33名（55%）、2016年入学者27名（43%）。

#### (4) 質問項目

添付資料1参照。

### 3. 結果と考察

#### (1) 回答者属性

卒業生アンケートの回答者属性を表1に示した。入学年次は、2014年入学者24名、2015年入学者33名、2016年入学者27名である。在学時の所属コースは、グローバル社会コース（現・国際公共政策コース）27名（32.1%）、社会動態コース33名（39.3%）、共生文化コース19名（22.6%）、オランダ特別コース5名（6.0%）である。オランダ特別コースの卒業生の特徴が、回答結果全体に反映されにくいことに留意する必要がある。

回答者の卒業後の進路は、民間企業就職者65名（77.4%）、公務員および団体職員就職者5名（6.0%）、進学者10名（11.9%）、その他4名（4.8%）となっている（表2）。就職者のうち離転職した者は、1期生2名（10.5%）、2期生3名（12.0%）の5名であった。その理由は、表3の通りである。

なお、離転職者のうち、正社員として再就職した者は3名、個人事業主として起業した者は1名、無業者は1名となっていた。

表 1. 回答者属性

	男性	女性	総計
2014年入学（1期生）	3	21	24
グローバル社会コース（国際公共政策コース）	1	5	6
社会動態コース	1	9	10
共生文化コース	1	6	7
オランダ特別コース		1	1
2015年入学（2期生）	10	23	33
グローバル社会コース（国際公共政策コース）	5	7	12
社会動態コース	3	9	12
共生文化コース	1	4	5
オランダ特別コース	1	3	4
2016年入学（3期生）	3	24	27
グローバル社会コース（国際公共政策コース）	2	7	9
社会動態コース	1	10	11
共生文化コース		7	7
総計	16	68	84

注1. 単位は人数

表 2. 卒業時点における進路

	就職		進学	その他			総計
	民間企業	公務員および団体職員	進学	進学準備	公務員受験準備	その他	
2014年入学（1期生）	21	1	2				24
2015年入学（2期生）	26	2	5				33
2016年入学（3期生）	18	2	3	1	2	1	27
総計	65	5	10	1	2	1	84

注1. 単位は人数

表 3. 離転職した理由

	計
1 社目が自分に合わなかったため	1
興味本位	1
自己都合	1
前職を心から面白いと思わなかったから（やりがいがない）	1
（空欄）	1
計	5

注1. 単位は人数

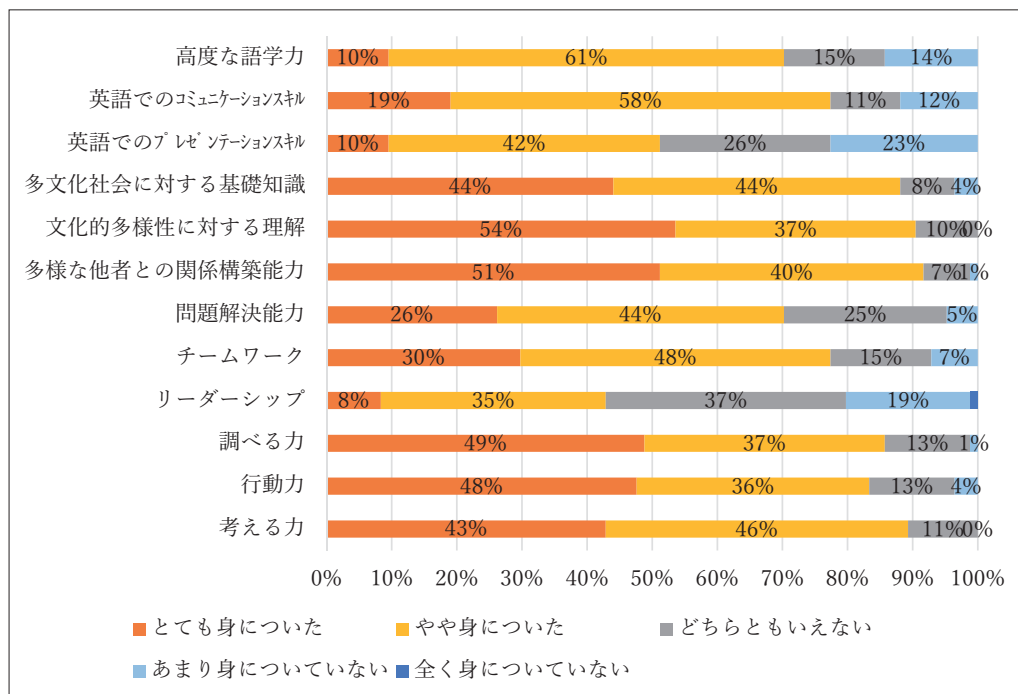
## (2) 学習成果

本学部のディプロマポリシーを参考に学習成果と実社会における教育効果の関連について、問10「あなたは、大学生活を通して、以下のことがどの程度身についたと思いますか」および問11「実社会において、それらがどの程度役立っていると思いますか」を中心に質問した。

その結果、卒業生が大学生活を通して身につけることが出来たと感じている項目のうち、「とても身についた」および「やや身についた」を足し合わせた回答割合が高かった項目は、「多様な他者との関係構築能力」(92%)、「文化的多様性に対する理解」(90%)、「考える力」(89%)、「多文化社会に対する基礎知識」(88%)、「調べる力」(86%)となっていた(表4)。語学に関しては、「英語でのコミュニケーションスキル」(77%)、「高度な語学力」(70%)、「英語でのプレゼンテーションスキル」(51%)となっていた。他方、学生時代に「あまり身につけていない」および「全く身につけていない」と感じている割合が高い項目は、「英語でのプレゼンテーションスキル」(23%)、「リーダーシップ」(20%)、「高度な語学力」(14%)であった。

表4に示す12項目が実社会において、どの程度役立っていると感じているのかを表5に

表4. 大学生活を通して身につけた知識・能力



示した。卒業生が大学生活を通して身につけることが出来たと思っている項目のうち、実社会において「役立っている」および「やや役立っている」という割合が高かった項目は、「行動力」(76%)、「調べる力」(76%)、「考える力」(73%)、「多様な他者との関係構築能力」(71%)、「問題解決能力」(66%)となっていた。

本学部での学びで良かったこと、実社会で役立っていることについて、問17では自由記述による回答を求めている。その回答をKJ法により整理した結果、「語学・海外経験」「多文化社会学部での学び」「多文化社会学部での学びを通して培った能力」「授業外での学び」「就職支援」からなる5つのカテゴリーに分類することが出来た(表6)。

なお、ここでは、多文化社会学部での学びについて、「良かったこと」と「実社会で役立っていること」を同じ設問のなかで尋ねている。これらは質的に異なる内容である。そのため、卒業生がどちらを念頭に答えたものかは分からない。そのため、本稿では、これ以上の言及は出来ない。しかし、卒業生が本学部における学びや多様な機会について、どのように評価しているのかをうかがい知ることは出来るだろう。

ここでの特徴は、以下の2点である。第1は、「調べる力」「行動力」「考える力」といった学びを通して培われるジェネリックスキルが、仕事場面においても有効に機能している

表5. 大学生活を通して身につけたことが実社会でどの程度役立っているか(就職者)

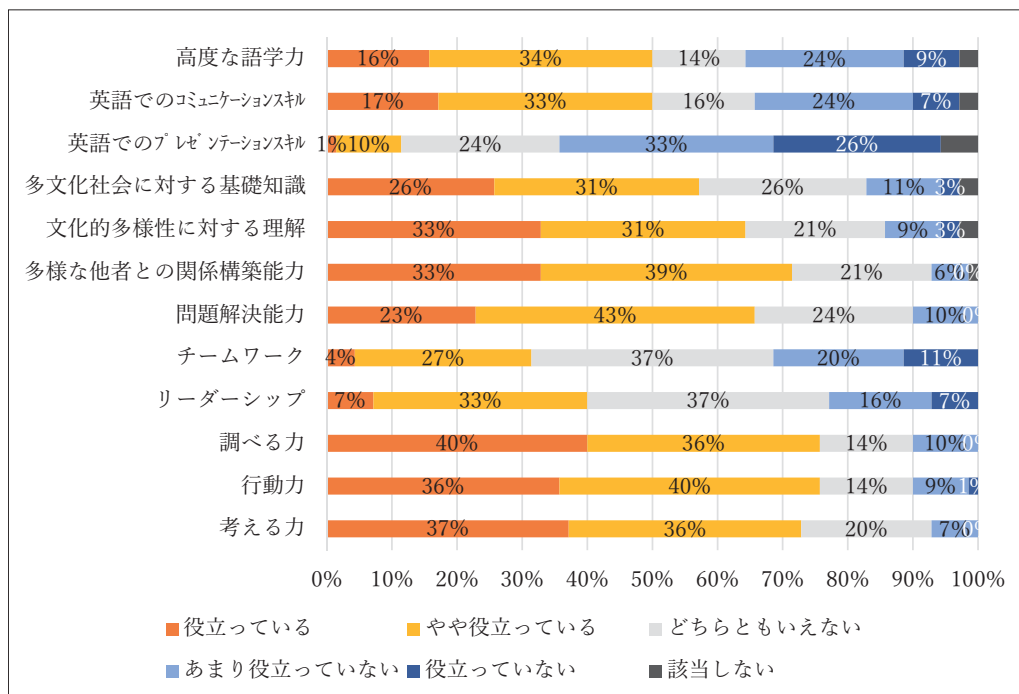


表6 本学での学びで良かったこと、実社会で役立っていること

カテゴリ	サブカテゴリ	該当数	具体的な記述内容	
語学・海外経験	語学力	7	英語。語学力。英会話力。英語でのコミュニケーションスキル。	
		1	外国の方と話すのに他人よりも抵抗や躊躇がないこと。	
		1	個人差はあると思うが、多少なりとも英語に触れる機会が継続してあったので、最低限の英語力は自分のものにできる。	
	留学・海外経験・留学生との交流	3	留学経験。	
		2	海外との関わり。 留学生との交流。留学生とのグループワーク。	
多文化社会学部での学び	多文化社会学部での学び	1	多文化の専門科目の勉強は貴重な経験・学びとして、実社会でも役立っている。	
		1	自分がやりたい勉強を一生懸命できたこと。	
		1	たくさん頭を使うレポートや課題があって追い込まれる経験。	
		1	授業内容。	
		1	宗教観。	
		1	多文化理解教育。	
		3	フィールドワーク。ゼミ。増田ゼミのフィールドワーク。	
		1	学んだ専門知識が直接実生活に役立つことはなかなかありませんが、大学時代に鍛えた英語力（注1）とコミュニケーション能力（注2）や、幅広い知識や多様な価値観を得られたことは今後の人生を必ず豊かにしてくれるものだと思います。	
		1	よほど業務として扱っていない限り、社会人になってから学部で学んだようなこと（社会科学系）に触れる機会はないので、4年間でそれらに対する基礎知識や関心、今でも気になって調べる程度のアンテナ的なものは築けたと思う。	
	基礎知識／探求心	1	世の中には沢山の人がいて、多種多様な考え方や価値観があって、それら全てを受け入れて理解する力が付いたのは、多文化社会学部のおかげだと思っています。みんなが頑張ってみんないい、一番大切な事を学ぶことができてよかったです。	
		1	多様な価値観、多様なバックグラウンド、多様な思いがあることを知れた。	
		1	役立つわけではないけど、絶対に多様性を学ばせることは続けたほうが良いと思う。人間性にかかわると思うので。	
		1	他者への理解。	
		1	多様な価値観への理解。	
		1	他文化に対する寛容な態度。	
多文化社会学部での学びを通して培った能力	思考力・探求心	1	多文化の違いをマイナスなものではなくプラスに捉えられる姿勢。	
		1	批判的思考力。	
		1	目に見えるものを疑う力。それを自分の頭で考える力。	
		1	考える力。	
		1	社会問題について複数言語を使って一次情報まで調べ、より深く批判的・論理的に考え、行動することができるようになった。	
		1	自分の興味に向かって良い意味で放任だったのが良かった。自分で考えて学ぶ力を習得できたと感じる。	
		1	調べて必要な情報を選ぶ力。	
	プレゼンスキル	1	自分で調べて考える力、習慣がついたこと。いろんなことに興味を持ち、考えることが出来るようになったこと。	
		1	プレゼンする力。	
		コミュニケーションスキル	2	コミュニケーションスキル上がりました。コミュニケーションスキル。
			1	レポート作成やプレゼンテーションが多かったことから、WordやPowerPointのソフトを問題なく使えたこと。
		ものの見方・考え方	1	「世の中には、どれだけ学んでも答えが見つからないことがある」ということを学部生時代に実感しており、その価値観は今でも役に立っています。
			2	多角的な視点から学ぶ姿勢。
		やり遂げる力	1	最後までやり遂げる力（卒業論文や留学）。
		文章力・論理的思考力	1	多文化社会学部はレポートが多く、卒業論文の受理条件も厳しかったイメージがある。学生の時は大変だったが、一つの物事を深く、多角的に考え（注3）、文章にまとめる訓練ができたことはいい経験だった。今の自分の仕事には欠かせない能力の一つ。社会人になってから身に付けようと思っても、そうした時間はなかなか取れない。
問題発見・解決力	1		問題解決力。	
	1	問題把握と解決策を見つければ役立っている。		
授業外での学び	寮生活	1	寮生活。	
		1	共同生活。	
就職支援	就職支援	1	就職セミナー。	

注1. 「大学時代に鍛えた英語力」は、サブカテゴリ「語学力」の「英語」においてもカウントした。

注2. 「コミュニケーション能力」は、サブカテゴリ「コミュニケーションスキル」でもカウントした。

注3. 「一つの物事を深く、多角的に考え」は、サブカテゴリ「ものの見方・考え方」でもカウントした。

と考えられることである。これには、業界や職種によって違いはあると考えられるが、本稿の調査対象者が卒業後3年以内であることから、いまだ業務内容や専門知識を吸収する段階にあることも影響しているといえるだろう。第2は、多文化社会学部が重要視する「文化的多様性に対する理解」や「多様な他者との関係構築能力」が、実社会においても役立つと感じている者の割合が高いことである。学生時代とは異なり、実社会では年齢や立場、利害関係の異なる多様な他者との関係構築や協働が求められており、こうした学びが活かされているものと思われる。大学での学びと職業能力や社会人としての基礎スキルとの関係性については、今後も継続的に検討したい。

他方、実社会での経験をもとに、本学部においてより力を入れた方が良いことについては、7個のカテゴリーと25個のサブカテゴリーがあった(表7)。

これらの結果は、卒業生が実社会での経験をもとに、学生時代に身につけた方が良いと感じたことをまとめたものであり、多文化社会学部としてより注力していくことが求められているものである。卒業生の指摘する項目のなかには、海外インターンシップの拡充や入試基準の見直し、語学の資格取得強化といったように、既に取り組みされているものも含まれている。「PCスキル」(特にエクセル)に関しては、2021年度から統計学に関する授業の必須化に伴い、改善が見込まれる。そのうえで、残された課題としては、以下の2点を指摘することができるだろう。

第1は、キャリア教育についてである。これは、担当教員が変わったこともあり、問題点を具体的に言及できない部分もある。しかしながら、卒業生の声からは、就職活動に役立つ実践的指導を求める声と、それだけに捉われない人生全体を俯瞰するようなキャリア教育を求める声があった。本来であれば、前者は就職支援担当部局が授業外に就職支援講座として提供すべきものであり、後者は教員が教育プログラムの一つとして担当すべきものであろう。しかしながら、多文化社会学部は、3年次夏からの中長期留学を推奨していることなどから授業スケジュールは相対的に過密であり、現状のキャリア教育では両者を混在させた実践内容になっている。結果として、中途半端な実践になっていることが指摘できるだろう。

第2は、多文化社会学部の強みでもある「多様な価値観」や「多様性の尊重」に関する学びについてである。本アンケートの結果からは、こうした学びが実社会でも役立つとの声は多い。そうだとすれば、こうした学びを基盤にゼミ等における調査・研究活動をより一層活性化させることにより、社会に出てから必要とされる専門性の向上にも貢献しうる

表7 本学部に対する卒業生からの提案

カテゴリ	サブカテゴリ	数	該当例
留学・海外経験・語学の強化	高度な英語力	3	更なる英語力向上。ビジネス英語（電話対応等）。 留学希望者にはより高度な英語の授業があれば良いと思います。英語力があればより色々なことに目を向けられる留学になると思います。
	留学	1	長期留学
	資格	2	TOEIC や TOEFL の受験環境のさらなる充実、資格取得推奨
	外国人との交流	1	日本在留外国人との交流
学部教育の拡充	科目	3	ジェンダー教育。人権教育。会計・財務。ビジネス論。 必修科目に経済系の科目があった方が良い。
	多様性への理解	2	多文化社会学部で学んだことが、就労後直接の業務で生かされたという実感は未だない。しかし、多様性への理解や人を観る目など、長い人生の中で生かせる能力を学ぶことができた事はとても良かったと思っている。
	外国人への理解	1	海外の人が日本で困っていること、例えば納税、でもそれが日本では義務になっていること等を教えたり、議論したらいいと思います。
	日本語能力	1	英語だけでなく日本語のアカデミックな作文方法を最初に指導して欲しい。受験勉強を通して作文技術を身につけられる学生ばかりではない。
	専門性	3	専門性。もう少し学問の専門性が高められるといいと思う（学んだ内容が幅広すぎたイメージがある）。専門性を高めてほしい。個人的に、大学は自らの専門分野を極める場所であってほしい。
PCスキルの育成	PCスキル	4	既に情報の授業があると思うのですが、パソコンのスキルに力を入れると社会に出た時に更に役立つと思います。ITスキル。
	エクセル	4	Excelなどの数字やデータを使うソフトの使い方。エクセル講座。少しでいいのでPCに関する知識（特にエクセル）を身につけるよう促す。
	プレゼンスキル	2	プレゼンテーションスキル、有効なPPTの作り方（デザイン）等。
	ワード	1	ワードの使い方
能力の育成	コミュニケーション能力	2	発信力、コミュニケーション能力
	創造力	1	自分で考え、何かを創り出す能力。クリエイティビティ。
	問題解決力	1	問題解決力
キャリア教育・インターン・就職支援の拡充	社会に必要な知識・能力	1	実社会に出たときに必要な知識・能力の教育（語学含む）
	就職支援の拡充	4	外国語を使用できる就職先へのサポート。学部内で完結するのではなく、他学部との交流等見聞を広められるようなプログラム。自己分析。業界研究。中長期留学組への就活支援。
	実践的な就職支援	1	就職活動の具体的なロールプレイ。座学ではなく、グループディスカッションや面接練習を授業中に実施するなど、実践の場を無理やり作るくらいでないと、都市部との就活への考え方を縮める（危機感を持つ）ことができないと思う。
	キャリア教育の充実	1	キャリア形成論を、ただの就職活動的なテクニック論ではなく、「将来いつまでにどうなっていきたいか」「そのためには今、あるいは卒業後に何をどのようにどのくらいしなければならぬのか」という具体的かつ本質的な内容にすれば、学生たちの助けになると思います。
	海外インターン	3	海外インターン制度
	海外ボランティア	2	海外ボランティアなどのプログラム推奨
入試基準の見直し	インターン	1	国内外での実践的なインターンシップ（ジョブ型のものなど）
	入試基準	1	入学試験の合格基準に関して、外国語能力だけでなく、論理的思考力やGRIT力の比重を上げるべきだと思います。そうでないと、入学後に努力できない者や調べる・考える・発言することができない者が多く集まる可能性があります（多文化社会学部の卒業生に限らず、英語が話せるだけのバカは社会に溢れています）
特になし	特になし	2	特になし



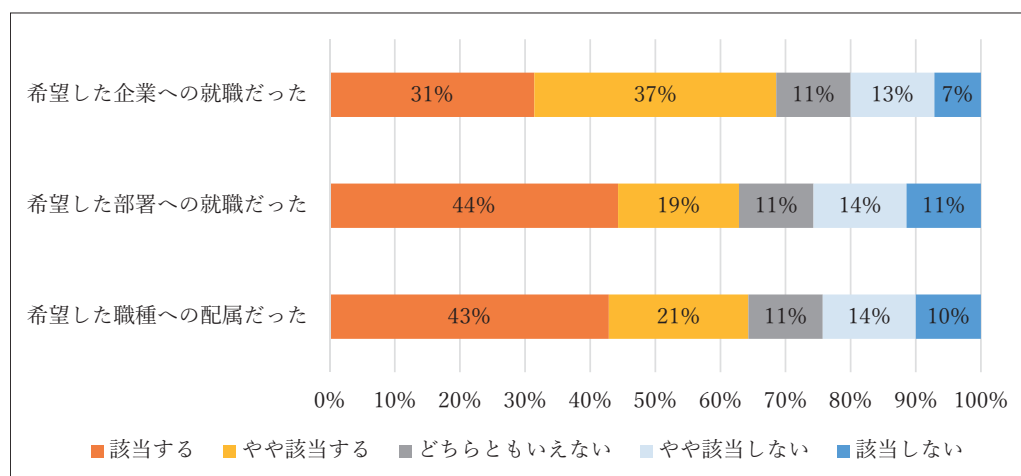
ことが推測できる。調査・研究活動の拡充は、論理的思考力をはじめ、創造性や発信力、PCスキルなど幅広い能力の育成にも寄与しうるものと思われる。

### (3) 卒業生の初期キャリア

前述したように、本学部卒業生の進路選択先として最も多いのは就職（民間77.4%、公務員および各種団体職員6%）であった。ここでは就職者に着目し、大学での学びと初期キャリアとの関係について述べていく。

卒業生は、就職先やそこでの仕事についてどのように感じているのだろうか。まず、配属状況について確認していく（表8）。設問に対して、「該当する」と「やや該当する」を合計した結果を見ていくと、「希望した企業への就職だった」（68%）、「希望した部署への配属だった」（63%）、「希望した職種への配属だった」（64%）となっていた。ここでの特徴は、以下の2点である。第1に、「希望した企業への就職だった」と回答した者の割合は、本学部就職委員会が進路の決まった4年生に対して実施している就職先アンケートの結果よりも大幅に低い。本稿では、その理由について具体的に言及することはできない。しかし、在学中の場合、就職先が決まったことへの安心感から満足度が高く表れていたことが考えられる。卒業後、一般的に社会の厳しさに直に触れて、不採用となった企業に対する未練や、進路選択を安易に考えていたといった就職活動に対する反省や後悔の念が出てくる。その結果、志望度が低下したものと思われる。第2は、入社後の配属についてである。日本企業の文系新卒採用は、総合職採用が一般的である。アンケート結果によれば、

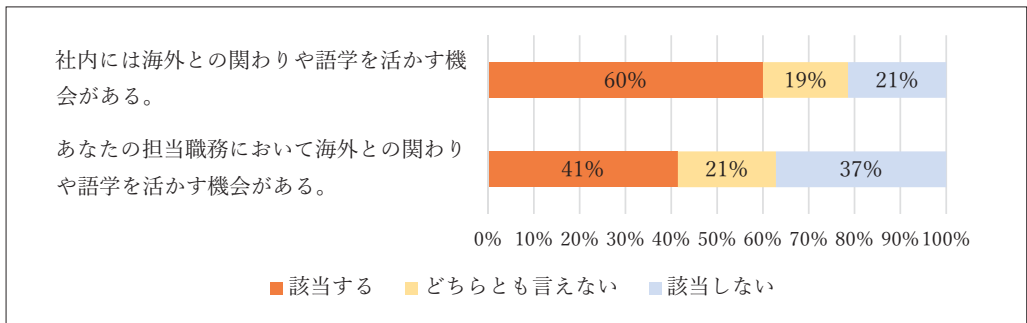
表8. 卒業生の初期配属について



6割～7割は本人の希望を考慮した配属が行われていた。就職活動の際、総合職採用であったとしても、学生は入職後のビジョンについても考えて、企業の事業領域や職種について研究することの必要性を示唆している。

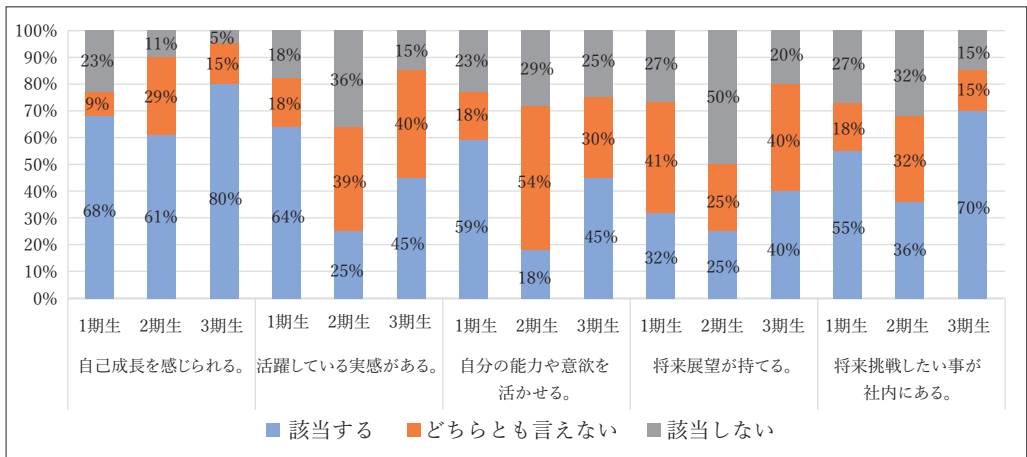
表9は、職場における語学の使用状況である。この表からは、卒業生の就職先のうち6割は海外取引などで語学を活かす機会があり、就職した卒業生の4割は担当職務において語学を活かしていることが分かる。

表9. 職場における語学の使用状況



次に、入社後の自己成長と将来性評価である。問15にある「自己成長を感じられる」「活躍している実感がある」「自分の能力や意欲を活かせる」「将来展望が持てる」「将来挑戦したい仕事社内にいる」の回答結果をまとめたのが表10である。自己の成長や活躍している実感は、職業スキルの獲得や担当職務の難易度、評価制度によっても変わってくる。本アンケートには、卒業後間もない3期生（2020年3月卒業）も含まれていることから年次別に見ていく。

表10. 就職先での成長感・活躍実感および将来展望等（入学年次別に表記）



調査に回答した卒業生のうち7割は、仕事を通して自己成長を実感している。ただし、3期生においては、実務を通じた成長感もあると思われるが、新入社員教育や現場実習等から得た成長感とも考えられる。「活躍している実感」や「自己の能力や意欲を活かせる」に関しては、1期生が最も高く、次いで3期生、2期生の順となっていた。将来展望に関する設問においては、3期生が最も高く、次いで1期生、2期生の順となっていた。各設問への回答は、入学年度によってバラつきがあるものの総じて言えることは、①就業期間と各設問への回答結果には相関関係が認められなかったこと、②2期生の各設問に対するポジティブな回答割合は相対的に低かったこと、2点である。その理由について、本稿ではこれ以上の言及はできない。後輩となる新入社員が配属され、先輩として独り立ちが求められる時期であることを考えると、周囲からの期待に応えられるほどの業務知識やスキルを十分に身につけられていないことへの焦りがあるものと思われる。

#### （４）多文化社会学部への期待

卒業生が実社会で活躍していくためには、多文化社会学部として、どういった取り組みが求められているのだろうか。本節では、学生時代に身につけた能力が仕事において活躍しているという実感に及ぼす影響を確認することで、大学における学びの有用性について検討したい。

問10「大学生活を通して、以下のことがどの程度身についたと思いますか」にある12項目の能力は、いくつかの高次能力にまとめることができると考えられるため、探索的因子分析を行なった（主因子法）<sup>i)</sup>。スクリープロットと因子の解釈可能性から因子構造を検討し、4因子構造が妥当であると判断した。第1因子「語学」、第2因子「多文化社会学部での学び」、第3因子「ソーシャルスキル」、第4因子「探求心」であった。

就職先や職場に関する満足度を質問した問15「今の仕事について、以下の項目にどのように感じますか」にある5項目についても因子分析を行なった（主因子法）<sup>ii)</sup>。その結果、1因子構造が妥当であると判断した。因子名は「活躍実感」とした。

仕事において活躍していると実感するには、学生時代に身につけた能力に加えて、配属や労働条件等も影響していると考えられる。そこで、どのような能力や項目が仕事における活躍実感に影響を及ぼしているのかを明らかにするために、前者を独立変数、後者を従属変数とした重回帰分析を行なった（強制投入法）。結果を表13に示す。その結果、「ソーシャルスキル」「職場の人間関係に満足している」「希望した部署への配属」「評価制度に

満足している」「学生時代にアルバイトを頑張っていた」が仕事における活躍実感に正の影響を与えていた。

表13. 活躍実感の重回帰分析の結果

	標準化係数 ベータ
語学	.028
多文化社会学部での学び	-.010
ソーシャルスキル	.303**
探求心	-.147
職場の人間関係満足度	.251*
賃金満足度	-.030
評価制度満足度	.354*
労働時間・休日等への満足度	-.185 <sup>+</sup>
教育制度満足度	.008
希望した部署への配属	.301**
学生時代のアルバイト経験	.209*
R <sup>2</sup>	.613***

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

#### 4. まとめにかえて

本稿の目的は、本学部卒業生を対象に卒業後のキャリア形成の実態を把握するとともに、大学での学びと専門性の社会における有用性について考察し、学部教育のための基礎資料を提供することである。具体的には、在学中の学びや学生生活の過ごし方、就職後の配属や職場環境等に関して複数の設問を設け、教育効果と主に仕事場面における成長や活躍の実感（自己評価）について多角的に検証した。その結果、明らかになったことは、以下の3点である。

①多文化社会学部での学びで良かったこと、実社会で役立っていることとして、5個のカテゴリー「語学・海外経験」「多文化社会学部での学び」「多文化社会学部での学びを通して培った能力」「授業外での学び」「就職支援」と15個のサブカテゴリーが抽出された。

②卒業生は多文化社会学部での学びを通して身につけた「調べる力」「行動力」「考える力」が、実社会においても役立っていると考えていた。こうした能力を授業やフィールドワーク、ゼミナール等により育成していくことは、卒業後の初期キャリアに良い影響を与える可能性が考えられる。

③ソーシャルスキルが高いこと、職場の人間関係に満足していること、評価制度に満足していること、希望した部署への配属であったこと、学生時代にアルバイトを頑張っていたことは、仕事における活躍実感に正の影響を与えていた。ここでいうソーシャルスキルは、チームワークとリーダーシップに限定されたものであるが、前述したように多文化社会学部が「文化的多様性に対する理解」や「多様な他者との関係構築能力」を重要視していることを考えると、人間関係を構築し、協働していく能力につながっていることが期待できるだろう。

多文化社会学部での学びは、経営学やマーケティングといった実社会で即戦力として活かせるものではない。しかしながら、卒業生の記述内容からは、本学部での学びを通して身につけた「文化的多様性に対する理解」や「多様な他者との関係構築能力」と、その学びを通して身につけることが出来た「調べる力」「行動力」「考える力」は、初期の職業キャリアに良い影響を与えていることが明らかになった。本稿の意義は、この点にある。他方、「活躍実感」を従属変数とした重回帰分析の結果からは、ソーシャルスキル因子に有意差が認められたものの、「多文化社会学部での学び」因子や「探求心」因子に有意差は認められなかった。これには、こうした知識やスキルが仕事では役立つものの、それだけでは実社会で活躍できないとの見方も出来るし、活躍しているとの実感を得るにはもう少し時間がかかるとの見方も出来るだろう。業界や職種によって、仕事における成果が分かりやすいものと、そうでないものもある。こうした点については、今後も継続的に検討していく必要がある。

最後に、本稿は卒業生アンケートの結果からの分析となっている。アンケートへの回答は任意であり、回答した者はそうでない者と比べて、学部への愛着が強かった、学部教育に対して好意的であったことが考えられる。卒業後の社会人生活においても、離職率はおよそ10%と低かったように、比較的順調に歩んでいる者が回答したことも考えられる。そうだとすれば、ゼミナールの主指導教員を中心に卒業生との関係を構築していくことは、3つの点で意義深い。第1に、こうしたアンケート調査では照射されにくい学部教育の問題点や課題について、検討することができる。また、職業人としてのキャリア形成に躓きを感じている者に対しては、社会的孤立を防ぐことにもつながりうる。第2は、卒業生の実社会での経験をもとに、学部教育の有用性や課題について、より具体的に検討することができる。特に語学をいかした働き方を望む学生に対して、ビジネス場面で求められる語学水準等を知ることは、学びへの動機づけにもつながるだろう。第3は、学生が卒業後の

キャリアビジョンを描くうえで、卒業生の実体験は貴重なロールモデルになりうる。就職活動の際、学生はどうしても内定獲得が目的になりやすい。しかし、本稿の結果によれば、入社後のビジョンについても考えておく必要性が示された。卒業生の仕事内容やそこでのやりがい、苦労などを学生へと伝えていくことは職業観の涵養につながり、学生生活の過ごし方にも内省を促すことが期待される。

なお、本稿は限られた結果からの検討となっており、卒業生の声が十分に反映されたものとはなっていない。調査項目についても、より精査してしく必要性を認める。今後も継続した調査・研究を通して、学部教育の質的向上に貢献できれば幸いである。

末筆ながら、本アンケートにご協力いただいた卒業生の皆様に感謝申し上げたい。

## 引用文献

厚生労働省（2018）「平成30年若年者雇用実態調査の概況」

---

<sup>i</sup> 問10「大学生生活を通して、以下のことがどの程度身についたと思いますか」にある12項目の平均値、標準偏差を算出した。そして天井効果およびフロア効果の確認を行った。ここでは分析からの除外が必要なケースは無かった。次に、12項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は4.69、2.05、1.32、1.09…というものであり、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度、4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表11に示す。なお、回転前の4因子で12項目の全分散を説明する割合は76.29%であった。第1因子は4項目で構成されており、「英語でのコミュニケーションスキル」「高度な語学力」「英語でのプレゼンテーションスキル」など、語学に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「語学」因子と命名した。第2因子は3項目で構成されており、「多文化社会に対する基礎知識」「文化的多様性に対する理解」「多様な他者との関係構築能力」など、学部教育に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで、「多文化社会学部での学び」因子と命名した。第3因子は2項目で構成されており、「リーダーシップ」「チームワーク（協働能力）」であった。そこで、「ソーシャルスキル」因子と命名した。第4因子は3項目で構成されており、「調べる力」「考える力」「問題解決能力」となっていた。そこで、「探求心」因子と命名した。

表11. 学生時代に身につけたことの因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	成分			
	1	2	3	4
英語でのコミュニケーションスキル	.911	.283	.200	.210
高度な語学力（英語）	.890	.295	.107	.188
英語でのプレゼンテーションスキル	.841	.402	.169	.183
行動力	.568	.434	.500	.448
多文化社会に対する基礎知識	.303	.891	.328	.231
文化的多様性に対する理解	.341	.887	.295	.397
多様な他者との関係構築能力	.450	.831	.660	.322
リーダーシップ	.152	.312	.866	.291
チームワーク協働能力	.105	.324	.865	.416
考える力	.282	.290	.399	.888
調べる力	.161	.280	.295	.869
問題解決能力	.195	.579	.666	.750

因子間相関	1	2	3	4
1	-	0.397	0.237	0.251
2		-	0.475	0.390
3			-	0.462
4				-

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

♯ 就職先や職場に関する満足度を質問した問15「今の仕事について、以下の項目にどのように感じますか」にある5項目の平均値、標準偏差を算出した。そして天井効果およびフロア効果の確認を行った。ここでは分析からの除外が必要なケースは無かった。5項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は3.20、0.70、0.46、0.42…というものであり、1因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度、1因子を仮定して主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表12に示す。なお、回転前の1因子で5項目の全分散を説明する割合は100%であった。因子の構成は、「活躍している実感がある」「自分の能力や意欲を活かせる」「自己成長を感じられる」「将来展望が持てる」「将来挑戦したい仕事社内にいる」である。そこで、「活躍実感」因子と命名した。

表12. 仕事に対する意欲に関する因子分析結果（バリマックス回転後の因子パターン）

	成分
	1
@152活躍している実感がある	.850
@153自分の能力や意欲を活かせる	.832
@151自己成長を感じられる	.805
@154将来展望が持てる	.793
@155将来挑戦したい仕事社内にいる	.710

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

添付資料 1 卒業生アンケート調査

調査項目	回答
1 あなたの入学年度を教えてください。	1. 2014年入学（1期生） 2. 2015年入学（2期生） 3. 2016年入学（3期生）
2 あなたの性別を教えてください。	1. 男性 2. 女性
3 あなたの在学期間を教えてください。	1. 4年 2. 4年半 3. 5年 4. 5年半 5. 5年半 6. 6年以上
4 あなたの在籍コース（卒業時）を教えてください。	1. グローバル社会コース 2. 社会動態コース 3. 共生文化コース 4. 言語コミュニケーションコース 5. オランダ特別コース
5 4年間の平均的な GPA を覚えている範囲で教えてください。	1. 1.9以下 2. 2.0-2.4 3. 2.5-2.9 4. 3.0-3.4 5. 3.5-3.9 6. 4.0以上
6 大学卒業後の進路について、該当するものを選んでください。	1. 就職（民間企業） 2. 就職（公務員および団体職員） 3. 進学 4. 進学準備 5. 公務員受験準備 6. 家業を継ぐ 7. 起業 8. 無業および病気療養 9. その他
7 現在の状況を教えてください。	1. 卒業時と変わらない 2. 転職した 3. 退職し求職活動中 4. 退職した（現在は何もしていない） 5. 進学した 6. その他
転職・退職された方にお聞きします。その理由について、簡単に教えてください。	自由記述
8 現在の勤め先（自営業も含む）の業種（業界）を教えてください。	自由記述
9 あなたは、大学生活のなかで以下のことにどれくらい力を入れて取り組みましたか？	1. 該当しない 2. 頑張っていない 3. あまり頑張っていない 4. どちらともいえない 5. やや頑張った 6. 頑張った
①語学（英語）	
②語学（英語以外）	
③一般教養科目	
④学部の専門講義科目	
⑤ゼミ・卒論	
⑥フィールドワーク	
⑦中長期留学	
⑧アルバイト	
⑨部活・サークル	
⑩ボランティア・インターン	
⑪その他	
10 あなたは、大学生活を通して、以下のことがどの程度身についたと思いますか？	1. 全く身につけていない 2. あまり身につけていない 3. どちらともいえない 4. やや身についた 5. とても身についた
①高度な語学力（英語）	
②英語でのコミュニケーションスキル	
③英語でのプレゼンテーションスキル	
④多文化社会に対する基礎知識	
⑤文化的多様性に対する理解	
⑥多様な他者との関係構築能力	
⑦問題解決能力	
⑧チームワーク（協働能力）	
⑨リーダーシップ	
⑩調べる力	
⑪行動力	
⑫考える力	



11 実社会において、それらがどの程度役立っていると思いますか。	
①高度な語学力（英語）	
②英語でのコミュニケーションスキル	
③英語でのプレゼンテーションスキル	
④多文化社会に対する基礎知識	
⑤文化的多様性に対する理解	
⑥多様な他者との関係構築能力	
⑦問題解決能力	
⑧チームワーク（協働能力）	
⑨リーダーシップ	
⑩調べる力	
⑪行動力	
⑫考える力	
12 あなたの学生生活での学びと将来像との関係性について教えてください。	
①私は将来の為に頑張っていたことがあった。	
②私は将来の夢や目標に向けて準備していたことがあった。	
③私は将来を意識しながら日常を過ごしていた。	
④私は毎日目標を立てて行動するようにしていた。	
⑤私は予定を立てて一日を過ごすようにしていた。	
⑥将来のことを考えても何にもならないと思っていた。	
13 就職された方にお聞きます。就職先（初職）の志望度を教えてください。	
①希望した企業への就職だった	
②希望した部署への配属だった	
③希望した職種への配属だった	
14 就職された方にお聞きます。今の仕事について、どの程度満足していますか。	
①就職企業について	
②配属先について	
③仕事内容について	
④職場の人間関係について	
⑤賃金について	
⑥福利厚生について	
⑦評価制度について	
⑧労働時間・休日等について	
⑨教育制度について	
15 就職されている方にお聞きます。今の仕事について、以下の項目にどのように感じますか。	
①自己成長を感じられる。	
②活躍している実感がある。	
③自分の能力や意欲を活かせる。	
④将来展望が持てる。	
⑤将来挑戦したい仕事当社内にある。	
⑥社内には、海外とのかかわりや語学を活かす機会がある。	
⑦あなたの担当する仕事には、海外とのかかわりや語学を活かす機会がある。	
16 実社会での経験をもとに、本学部においてより力を入れた方がよいと思うことがあれば教えてください。	自由記述
17 本学部での学びで、良かったこと、実社会で役立っていることがあれば教えてください。	自由記述
18 その他、本学部へのご提案・ご意見がありましたら、ご自由にお書きください。	自由記述